
戦国BASARA ～海竜が進む道～

鉄の字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA ～海竜が進む道～

【Nコード】

N4095Y

【作者名】

鉄の字

【あらすじ】

時は群雄割拠の戦国時代。

数々の猛者達が日の本の天下を狙うべく戦い続ける時代。

日の本には三人の戦国最強が居る。

三河を治める徳川軍大将 徳川家康の家臣 本多忠勝は余りの強さの故『戦国最強』と呼ばれている。

そして、その本多忠勝と同等に戦う『鬼島津』こと島津義弘。

ザビー教の伝道者 大友宗麟に仕える家臣 『西の宗茂』立花宗茂。

だがしかし、この日の本には知る人ぞ知るもう一人の戦国最強がいた。

拠点は無く、只船に乗り商売をする男。
名を嘉風 陣丸。

その強さは先の三人と同等。

皆はその者をこう呼ぶ『海竜嘉風』と。

第一陣（前書き）

どうもゝ鉄之字です。

この小説では最強オリ主でBASARAを書いていこうと思います

更新は不定期です。

第一陣

時は群雄割拠の戦国時代。

数々の猛者達が日の本の天下を狙うべく戦い続ける時代。

そして、この日の本には三人の戦国最強が居る。

三河を治める徳川軍大将 徳川家康の家臣 本多忠勝は余りの強さの故『戦国最強』と呼ばれている。

そして、その本多忠勝と同等に戦う『鬼島津』こと島津義弘。

ザビー教の伝道者 大友宗麟に仕える家臣 『西の宗茂』立花宗茂。

だがしかし、この日の本には知る人ぞ知るもう一人の戦国最強がいた。

奥州のとある海岸。

そこには二つの影があった。

一人は隻眼で右目に眼帯をして、三日月の兜を被り、右腰に三本、左腰に三本、計六本の刀を差している青年。

もう一人は髪をオールバックにして左頬に傷跡があり、右腰に二本の刀を差した男性だった。

「なあ、小十郎。本当にその伝説の商船とやらは来るのか？」

「はい、政宗様。部下が偶然、その者と通じる為の伝書鳩を見つけたので間違いないかと。」

眼帯をした青年の名は伊達 政宗。
奥州を束ねる若き奥州筆頭である。

左頬に傷跡がある男性は片倉 小十郎。
政宗が幼少の頃から仕えている政宗の頼れる家臣である。

二人は今、数日後に始まるであろう『甲斐の虎』こと武田 信玄と『越後の龍』こと上杉 謙信が戦を始めると聞き、漁夫の利を狙おうと戦の準備を始めていたが武具が足りず困っていた。

だが、ある時、一人の部下が森で木に止まっている黒いスカーフを巻いた伝書鳩を偶然見つけた。

その黒いスカーフの伝書鳩は知る人ぞ知る伝説の商船の伝書鳩だからだ。

その伝説の商船とは滅多に人前では現れる事は無く、追っても何故か消えてしまうとされている。

そして、その商船を率いている船長は噂曰く本多 忠勝、島津 義弘、立花 宗茂と言う日の本の最強と同じ強さを持っているらしい。

政宗の部下は直ぐに伝書鳩を捕まえ、武具の注文を書いた紙を脚に括り付けて飛ばすと数日した後、伝書鳩が戻って来て、武具の取引の日にちと今、政宗達が居る海岸を示した地図が括り付けられていた。

そんな経緯があり、政宗達は待っているが全く現れる気配がない。

「小十郎、本っ当にその商船は来るんだな。」

「政宗様、今は耐え時です。」

「Hun! んなぐらい分かってる。」

政宗達は待とうとするが何刻待っていても何も現れる様子は無い。只、波が揺れるだけだった。

イライラが募る政宗を見て小十郎は城に戻ろうかと思い政宗に話しかけようとした時だった。

ゴポゴポ……………

突然、海から泡が浮いてきた。

「Ah? 何だ?」

政宗は浮いてきた泡を不思議に思い、身を乗り出して海を見る。

ゴポゴポゴポゴポ!!

次第に泡の数が増えて海面に500mはある影が現れた。

「政宗様!!」

「小十郎、どうやらお出ましの様だぜ。」

慌てる小十郎に対し、政宗は口角を上げて笑っていた。

そして、影は大きくなり一キロに達した所で姿を現した。

ゆっくりと浮上して現れたのは船首に海竜が付いた巨大な鉄の船だった。

噂に聞いた長宗我部軍が開発している巨大要塞と同じくらいの大きさだろう。いや、それ以上だろう。

そして、甲板から一人の男が飛び降りて政宗達の前に降り立った。

男は短い黒髪で顔の右目上に傷があり、足鎧に黒いコートを羽織って、左腰に太い刀を差し、左手には海竜の装飾が施された薙刀を持っている。

「Hum、お前が伝説の商船の船長か？」

政宗が聞くと男はニヤツと笑い答える。

「はい、どうも！本日は俺達『海竜隊』を御利用頂きありがとうございます
ごさいまゝす！俺、この商船の船長をやらしていただいています嘉
風 陣丸と申します。何卒よろしくお願いします！」

政宗達は余りの腰の低さに声が出なかったとか。

第一陣（後書き）

どうでしょうか？

最初からグダグダですみません。

こんな感じで続けていこうと思います。

第二陣

「Hum、お前が伝説の商人か？」

「おう！伝説の商人、『海竜陣丸』とは俺の事よ！あんたこそ月形の前立てに六振りの刀に片目の眼帯。伊達政宗に間違いないな！」

「オイお前、さっきの腰の低い敬語はどうした？」

急に腰の低い言葉遣いから急に男らしい口調に変わり戸惑った小十郎は陣丸に尋ねる。

「あゝ、あれは挨拶みたいなものだから普段はこんな感じだぜ。」

「そ、そうか。」

ニカッと笑いながら平然に返す陣丸に小十郎は少し焦った。

彼の笑顔には何も悪意は無く、ただ純粹な笑顔であるからだ。

「小十郎、話はそこまでにしろ。おい嘉風、頼んだ物は持ってきたんだろうな？」

「当たり前だっつーの。オイ、テメー等！！」

「」「」「へい、頭！！」

陣丸が政宗の言葉に船に向けて大声を上げると船の側面が開き中から複数の男の大声が聞こえた。

男達は開いた所から海岸に橋を架けると防具や刀を乗せた台車を引いて政宗達の前に止める。

「刀五百振りに防具二百個、政宗さんよ、あんたえらくデカイ戦に行くつもりなんだな？」

注文の紙をペラペラと捲りながら言う陣丸。

「それをお前に教えるとも思うのか？」

「いんや別に聞こうとも思わねえよ。ちょっと興味があっただけだ。そうだな、」

……………例えば武田と上杉の漁夫の利を狙うとか？」

少し間を置き言った陣丸の言葉に小十郎が瞬時に刀を陣丸の首にあてた。

「おお！流石だな竜の右目。」

「」「頭！」「」

「……………テメエ、その情報をどこで聞いた？」

少し殺気を込めた声で政宗は嘉風に聞く。

武田と上杉の戦いに乱入する事は誰にも言っていない極秘の作戦である。

その情報をバレたとなると陣丸を殺すしか手は無い。

そんな状況に陣丸は肩を竦め笑みを崩さない。

「安心しろって。俺達は商人だから情報を他所にバラす真似なんかしねえよ。」

「その言葉を信じると思うのか？」

「この商人魂に誓う。」

政宗は陣丸の目を見据え、陣丸は政宗の目を見据える。
お互いの目を見つめ合って暫くの時間が流れる。

「OK、小十郎、刀を下ろせ。」

「政宗様!？」

「こいつの目は本物だ。嘘を付かねえ。」

「……………分かりました。」

政宗の命に小十郎は陣丸に当てた刀を下ろした。

「ありがとな政宗さん。お前等も刀を収めろ。お客様に失礼だ。」

「」「」「へ、へい、頭!」「」「」

「You're welcome. そんな事よりもよ……………」

政宗は台車の中から刀を一振り取り出して少し刀を抜く。
その濁りのない綺麗な刀身を見て政宗は刀を鞘に収める。

「ん？商品に不備でも？」

「いや、excellent. この刀をこれっぽっちの金で買っているのか？」

「別にいいよ。その刀は俺の船で作っている刀だし、材料も俺達が調達しているから値段は安いんだよ。どこで調達しているかは企業秘密な。」

「Hum、成る程な。小十郎、金を頼む。」

「ハッ、政宗様。オイ、これでいいか？」

小十郎は金の入った袋を渡し、陣丸は中を見て枚数を数える。

「あいよ！確かに頂いたぜ！じゃあ、俺達は他の所に行かないといけないからもう行くぜ？」

陣丸はそう言い背中を向けて政宗達から去ろうとした時だった。

「待てよ、嘉風。」

「んあ？まだ何か用があるのか？」

政宗は振り返る陣丸にニヤツとニヒルな笑みを浮かべる。

「お前はよお、竜はこの日の本に一頭で充分だと思った事はあるか？」

その言葉を聞いた時、陣丸の顔は初めて真面目な顔になった。

「俺の中にいる竜は共存を望んでいるけどな。」

「悪いが俺の中の竜は今にでも暴れだしそうなんだよ。」

「それはそれは凶暴な竜だな。」

「Yes. だからよ……………」

政宗は六爪の内の一振りを抜いて陣丸に向ける。

「俺とbattleしようぜ？」

第三陣

突然、政宗に勝負を挑まれた陣丸。

だが陣丸は困ったように頬を指でポリポリと掻いていた。

「悪いが断わる。」

「What? どういう事だ? 俺じゃ役者不足ってか?」

「いやいやいや、別にそういう訳じゃないんだ! もっと別の理由!」

勝負を断った陣丸は機嫌を悪くする政宗を見て慌てて手を横に振って答えた。

「政宗さん、俺は何て呼ばれている?」

「Ah? 『伝説の商人』だろ?」

「そう、俺は商人なんだ。商人は物を売る側。つまり、物を買ってはいけないんだ。例えばそれが喧嘩、勝負であってもな。」

陣丸のポリシー。

それは、売られた喧嘩または勝負を買わない事。

今まで陣丸は色々な武将達に勝負を挑まれた事はあるが全て断っている。

それが陣丸の考えであり、商人としての誇りである。

「成る程な。あんたのPolicyは分かった。だが、俺はまだあんたと戦いてえんだ。」

まだ勝負を挑む政宗。

そんな政宗に陣丸は一つ聞いてみる事にした。

「政宗さん、あんたはどうして天下が欲しいんだ？」

「そんなの決まっている。天下を獲って戦の無い、誰もが笑ってくらせる泰平の世を作る。」

「誰もが笑ってくらせる………か。小十郎さんは？」

「俺は竜の右目として政宗を護る。」

政宗と小十郎の答えを聞くと陣丸は満足したような顔をして薙刀を政宗に向ける。

「この嘉風陣丸。武士として政宗さんに喧嘩を売らせていただく！」

「An? どういう事だ? さっきまで断っていたのによ。」

「俺は政宗さん達の心意気に感服しただけさ。俺は天下には興味ないけど出来れば政宗さんみたいな人に獲って欲しいんだ。」

「Ha! 任せな。必ず獲ってみせる。じゃあ、始めるとするか。」

「ああ。」

「小十郎、手を出すんじゃないぞ。」

「はっ！」

陣丸と政宗は話を終えたとお互い武器を構える。

「海竜隊隊長 嘉風陣丸、商売いたす！」

「奥州筆頭 伊達政宗、推して参る！」

そして、お互い走り出し刃を交えた。

「あらら、陣丸の奴やり始めたぜ？」

「……………時間が無いのに。」

「時が来たら止めるか、副船長？」

「……………止める。」

「了解。」

「うおら!!」

「Y a l l H a l l ! !」

刀と薙刀。

二つがぶつかり火花が散る。

陣丸と政宗は目にも止まらぬような剣劇を繰り広げていた。

「いやはや、流石奥州筆頭だな!」

「H a ! まだまだこれからだ嘉風!」

鏑迫り合いから距離を置き、先に政宗が走り出す。

「M A G N U M S T E P !」

「うおっ! ?」

三振りの刀を指の間に挟み、それを回転しながら突撃してくる技に陣丸は腰の刀を抜いてそれを防いだ。

「危ねえ。じゃあ次はこっちから行くぜ？」

陣丸は一気に政宗に間合いを詰める。

「打ち寄せ波！」

そして、刀と短く持った薙刀を両方突き出す。

政宗は防ぐが陣丸は直ぐに刀と薙刀を引き、腕を交差して構え下にクロスして振り下ろす。

「引き波！！」

「くっ！」

政宗は余りの勢いに足を踏ん張りながらなんとか防いだ。

「ハハハ、政宗さんどうだ！？」

「楽しくなってきたじゃねえか嘉風！」

「もうそろそろ決めようぜ？」

「Ok!とびきりbigなものを撃ってやるぜ！」

政宗は刀を顔の横に構えると刀に雷が流れ出し、先に雷の球が生まれる。

次に陣丸は刀を地面に刺すと、薙刀を槍投げの様に構える。

薙刀は政宗と同じく雷が流れ、薙刀は雷で三叉の槍の様になった。

「Show downだ！HELL DRAGON！！」

「貫け！波動！！」

雷の球と三叉の槍が激突して辺りに閃光が走る。

小十郎や陣丸の部下も目を細め閃光が収まるのを待つ。

光が収まるとまだ武器を構えて睨み合う二人。

「まだまだだぜ嘉風。まだ物足りねえ。」

「俺もだ、政宗さん。もっとあんたとやり合いたい。」

「嘉風！」

「政宗さん！」

政宗と陣丸が叫び武器が交わる時、二つの影が二人の間に入り二人の攻撃を止めた。

「悪いがお二人さん、そこまでにしといってもらおうか？」

「……………終わり。」

一人は黒い短髪で青い足具を付け、裸の上に青い単衣を着て両手に棘が付いた手甲を付けた男が陣丸の刀を止めている。

もう一人は黒い髪を腰まで伸ばし、黒い袴に白い衣を着ていて両手に持ち手が曲がっていないリボルバー型の銃に剣が付いた剣銃をもった女が政宗の刀を止めていた。

「千夜^{ちよ}に謙太郎^{けんたろう}！？何をしてんだお前ら！？」

「お前が時間になっても帰ってこないからこっちが迎えに来たんだよ。」

「……………好い加減にしろこの馬鹿。」

「千夜、酷くね？」

毒を吐いた千夜にツツコミを入れる陣丸。

だが、政宗は不機嫌な目付きで千夜と謙太郎を睨んだ。

「おい、てめえら俺達の戦いに割り込むとはいいい度胸してるな。」

「……………うるさい、戦闘狂。」

「Ah！？」

「デメエ！！」

「待った待った政宗さんと小十郎さん！！ごめん、こいつこんな奴でさ！！ほら、千夜も謝れ！！」

「……………ふん。」

頭を下げる陣丸に対してそっぽを向く千夜。

陣丸は無理矢理千夜の頭を掴み、頭を下げさせる。

それを見た政宗は溜息を吐くと刀を収めた。

「まあ、いい。興が冷めた。頭を上げろ。」

「ありがとう政宗さん!!」

「…………陣丸、早く次の依頼に行く。…………そして、後で殺す。」

「何故に!?! え、ちょっと待って千夜!」

首元を掴まれ引きづられながら船の中に入って行く陣丸と千夜。
そして、謙太郎も政宗達に礼をすると部下と一緒に船の中に入って
行った。
船は入り口が閉まると海の中に消えて行った。

「政宗様、お怪我はありませんか?」

「No problem、心配ねえよ。それにしても小十郎、あいつをどう思う?」

「政宗様と戦っている時の嘉風はどうも本気を出している気はしませんでした。」

「ああ、あいつは本気を出せば戦国最強と同じかもしれないな。」

政宗と小十郎は陣丸の事について興味が尽きなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4095y/>

戦国BASARA ～海竜が進む道～

2011年12月25日14時48分発行